仏教に見る経済倫理のあり方

辻井清吾

一　「仏教と経済」に関する視点について

1「仏教と経済」に関する所見

「仏教に経済はない」という場合、その論拠としては、釈尊は世俗生活を捨てて出家した故、「生産するに及ばず、利殖するに及ばずして、自ら生活するに足る」という言葉を残したことが挙げられよう。また、中村元博士には、「産業を振興するための諸政策、農業政策・工業政策・商業政策については、仏典のうちに詳しい論述は殆んど見当たらない」との指摘もある。「事実、仏教の世界観や倫理が経済活動を積極的に促進した例は殆んどない。阻害要因の例が多い」との指摘もある。（奈良康明編『日本の仏教を知る事典』（東京書籍、一九九四年、三六〇頁）

ウェーバー（M. Weber）が「原始仏教のように、行為しないこと（無為）を救いの要件と考えるような宗教倫理は経済的問題と関連しない」と考え、「まったく首尾一貫した現世逃避的な立場からは、経済倫理ないしは合理的な社会倫理へと通じるいかなる途も存在しない」（外園幸一「経済と宗教・倫理」（『地域経済政策研究』鹿児島大学、二〇〇〇年、四二頁）と結論づけているのも、仏教を禁欲主義の超俗主義であると位置づけた事に由来して

いる。

反面、「仏教に経済がある」との必然性を説く場合、「仏教は単に超俗生活の有意義を唱えるのではなく、世俗と超俗との融和を説き、世俗を豊かに生きるための道を教えている故、世俗的活動としての経済問題について仏教は多く教えている」（大野信三『仏教社会・経済学説の研究』有斐閣、一九五六年、一五〇頁）との指摘がある。

両者の対立点は、仏教思想に対する理解の相違ではなく、経済に対する意見の相違にあろう。すなわち経済活動を単に「欲望充足の手段」と見るのではなく、「欲望におぼれる事なく満足を得るための手段」と見れば、仏教は経済に貴重な示唆を教えてくれるものとなろう。

2　学問的視点からの取り組み

最初に、「仏教と経済」に関する視点について学問的見地から真に取り組まれたのは、友松圓諦師[1]であり、自著『佛教経済思想研究』において、明快に、その問題点を展開した。

同時代（昭和初期）において、概観すれば、次のような文献が見られる。

・椎尾辨匡　「仏教と産業」（『正法閣』七三六～七六五号所収　昭和八年三～四月）
・友松圓諦　「佛教の経済思想」（『経済往来』九巻八所収　昭和九年八月）
・赤堀又治郎　「佛教と経済」（『日本及日本人』二五二号所収　昭和七年七月）
・多田鼎　「信仰と経済」（『佛教生活』三巻九所収　昭和八年一〇月）
・西義雄　「佛教経済思想研究に就いて」（『宗教研究』九巻五所収　昭和七年九月）

この時代においては、上掲書を含め、仏教が現実離れしていた状況に対する反省が顕著に述べられ、仏教自らが持つ社会的・現世的側面を見直そうとする視点が強かったと推察される。

その後の傾向としては、第一に、ウェーバー著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の複数の翻訳（梶山力、大塚久雄、阿部行蔵）を主に、その研究に影響された終戦直後からの動向が示され、主に仏教と日本資本主義の関係について考察されている。

第二に、一九六〇年代の経済成長に伴う、現在の環境問題の源点といわれる水俣病等四大公害病を発端とする環境悪化・破壊の状況とその影響に見られるような危機に遭遇した結果、新たな経済倫理を追求しようとする流れが見られ、「共生を求める今後の人類世界に果すべき仏教の役割」といえる視点に立脚するものが示されている。

上記の諸視点は相違があれども相互に融合されるべきものであり、同一の根本思想に帰着しうるものと思われる。

二　原始仏教に見る経済倫理のあり方

―「シンガーラ（Singala）（またはシンガーラカ（Singalaka）への教え」より―

原始仏教に経済倫理と呼ばれるものがあったかどうかということが先ず問題とされるが、少なくとも聖典には経済行為に関する倫理的評価或いは反省が諸点述べられている。その「経済活動に関する仏教の教え」について、最も引用されるのが、「シンガーラ（Singala）への教え」[2]である。

これは、釈尊がシンガーラというある資産家の子に、人間としての道を教示した内容を述べたものとして、パーリ語の原始仏教聖典の中に伝えられ、またそれに相当する漢訳が四種、漢文の大蔵経の中に伝えられているが、その文言はかなり相違している。歴史的には、この経典は南方仏教において、永年にわたり、在俗（在家）信者のための戒律として重視されている。

経典の書き出しは「一　このようにわたくしは聞いた。あるとき世尊は王舎城のカランダカ竹林に住んでおられ

た。そのとき資産家の子シンガーラは早く起床し王舎城を出て、〔郊外に至り、沐浴して〕衣を浄め、髪を浄めて、合掌して、東方・南方・西方・北方・下方・上方の各方角を礼拝した。」と始まる。

釈尊は続けて、「二　資産家の子よ、東方・南方・西方・北方・下方・上方のそれぞれの方角を礼拝するのは何故であるか？」「尊者よ、父が亡くなるときにわたしに遺言しました―『親愛なる者よ、お前はもろもろの方角を拝すべきである。』（…中略…）こういうわけで、衣を浄め、髪を浄めて、合掌して、東方・南方・西方・北方・下方・上方のそれぞれの方角を礼拝するのです。」と説く。後の『六方礼経』[3]ではそれぞれの方角に四拝したと伝えている。

釈尊は、「……資産家の子よ、立派な人の律においては、六つの方角をこのようなしかたで礼拝してはならない。」「では、資産家の子よ、聞け。よく注意せよ。わたしは話してあげよう。」と、世俗人のための倫理説を説きあたえるのである。

これらは資産家の子であるシンガーラが亡き父の遺言に従って六つの方角を崇拝していたが、釈尊はそれに対して、人間としての正しい倫理を実践することが、六つの方角を崇拝する儀礼の真の趣意にかなっているということを説き明かしたのである。

「五　……立派な弟子は、決して、貪欲により、怒りにより、迷いにより、恐怖によって非道に行くことがない。これらの四つのしかたによって、かれは悪い行いをしないのである」

「二七　資産家の子よ、立派な弟子は六つの方角をどのように護るのであるか？六つの方角とは次のものであると知るべきである。東方は父母であると知るべきである。南方はもろもろの師であると知るべきである。西方は妻子であると知るべきである。北方は友人・朋輩であると知るべきである。下方は奴僕・傭人であると知るべきである。上方は修行者・バラモンであると知るべきである。」

これらの方角への崇拝は、釈尊以前のインドではかなり古い時代から行われていた。「シンガーラへの教え」は、これらを大がかりに体系的組織的にしたものである。

釈尊は従前から行われていた宗教儀礼や習慣を頭から排斥するということをしなかった。釈尊はそれらを一応名目的には承認し、その上で新しい解釈を与え、あるいは忘れられていた本来の趣旨を取り戻し、実質的内容的にそれを改革したのである。たとえば、儀礼としての祭祀を行なうのは、真の祭祀ではなくて、人としての正しい道徳を守ることが真の祭祀であるという説きかたをする。この根本的な態度はアショーカ王にも顕著に継承されているが、その態度がここにも見られるのである。

この経典に説かれている道徳説は、アショーカ王（在位紀元前二六八年頃から二三二年頃迄）の詔勅（岩石詔勅三・四・七・九・一一・一三、小岩石詔勅、石柱七、Yerragudi詔勅）に出てくる教えと非常に良く似ている。（中村元『原始仏教の生活倫理』春秋社、一九七八年、四六三～四六五頁）例えば、岩石詔勅・三によれば、「父母に従順なれば善なり。また、朋友、親族、及び、バラモン、沙門に対する布施は善なり。生類を屠殺せざるは善なり。僅かに費やし、僅かに蓄うるは善なり。」との部分に、所謂アショーカ王の「法」の教化が、右の教えの目的と重なっていた事が明らかであると指摘できる。

特に、在俗信者の経済活動について『シンガーラの教え』において述べられた見解としては、次のようなものがある。

① 精励の努力

「一三　怠惰にふけるならば、実にこれらの六種のあやまちが起きるのである。（一）『寒すぎる』といって仕事をなさず、（二）『暑すぎる』といって仕事をなさず、（三）『晩すぎる』といって仕事をなさず、（四）『早すぎる』

といって仕事をなさず、（五）『わたくしははなはだしく飢えている』といって仕事をなさず、（六）『わたしははなだしく腹がふくれている』といって仕事をなさない。かれはこのようになすべき仕事に多くの口実を設けているので、いまだ生じない富は生じないし、またすでに生じた富は消滅に向うのである。資産家の子よ、実にこれら六つのあやまちは、怠惰にふけるがゆえに起きるのである」と。ここでは協同作業における怠惰が非難されている。（「『寒すぎる』とて仕事をなさない」という事をブッダゴーサは説明して言う。「時間が経ってから、人々が立ち上がって、『さあ、きみ、仕事に行こうよ』と言ったときに、『どうも寒すぎる。まず骨の節々が懐れそうだ。きみらは行ってくれ。ぼくは後でも判るだろう』と言って、火を焚いて坐っている。それらの人々は行って仕事をするが、他の人（＝かれ）の仕事はすたってしまう」と。ここでは協同作業における怠惰が非難されているのである。）（中村元『原始仏典』筑摩書房、一九八一年、八五頁）

② 消費の制限

「七　人の近づいてはならぬところの、財を散ずる六つの門戸とは何であるか？（一）酒類など怠惰の原因に熱中することは、実に、資産家の子よ、財を散ずる門戸である。（二）時ならぬのに街路を遊歩することに熱中することは、財を散ずる門戸である。（三）（祭礼舞踊など）見せ物の集会に熱中するのは、財を散ずる門戸である。（四）賭博という遊惰の原因に熱中すること、財を散ずる門戸である。（五）悪友に熱中すること、財を散ずる門戸である。（六）怠惰にふけることは、財を散ずる門戸である。」

富の蓄積をはかるためには、他面では消費を出来る限り少なくしなければならない。具体的な精神態度としては、奢侈享楽にふけらないように、財の消費を戒め、ふしだらな生活を非難している。財を散ずる六つの門戸のうち（一）酒類など怠惰の原因に熱中する事については、さらに言及がある。

「八　酒類など怠惰の原因に熱中するならば、次の六つのあやまちが生じる。即ち、（一）現に財の損失あり、（二）口論を増し、（三）疫病の巣窟となり、（四）悪い評判を生じ、（五）陰処をあらわし、（六）第六の原因として智力を弱からしめる。これらの六つのあやまちは、酒類など怠惰の原因に熱中するときに生じる。」

③　財の蓄積と活用

『収入四分の計』でも原始仏教においては、家長たるものは、勤勉に生業に従事して、かかる禁欲的精励によってやがて財を集積する事を勧めている。

「二六　このように財を集めては、かれは家族に良く利益をもたらす家長となる。その財を四分すべし。〔そうすれば〕かれは実に朋友を結束する。一分の財をみずから享受すべし。四分の二の財をもって、〔農耕・商業などの〕仕事を営むべし。また〔残りの〕第四分を蓄積すべし。しからば窮乏の備えとなるであろう。」

現在の経済からすれば、右記の本旨は、①社会的な支出、②家計費、③家業の運転資金、④不時の災害に備えるための貯蓄の四分割と言えよう。所得全体のうちの四分の三を、何らかの意味で生産のために回転活用すべきであり、それが家長としての道である、と説かれている。この規定は永くアジアの仏教諸国において経済の管理に対する指導原理としても伝承されており、また、江戸時代の二宮尊徳が遂行した「報恩仕法」の基礎となっているのも、この「四分法」と言われる。

ウェーバーは西洋近代初頭における「禁欲的節約価値による資本形成」を問題として次のようにいう。「獲得したものを消極的に使用することをさまたげた力は、その―投下資本としての―生産的用途を促進せずにいなかったのである。この作用がいかに強かったかを、正確に数字によって知ることはいうまでもなく全然不可能である。」と。ところが、すでに原始仏教のこの古代において、投下資本の割合が、概数にもせよ、数字を以て明示されている事

は、興味深い現象である。運転資金（投下資本）の準備を勧めている事は、商業資本の発達を促したものとして注目すべきである。

仏教伝道協会『仏教聖典』には、「人はだれでもその家計については、専心に蟻のように励み、蜜蜂のように努めなければならない。いたずらに他人の力をたのみ、その施しを待ってはならない。また努めて励んで得た富は、自分ひとりのものと考えて自分ひとりのために費してはならない。その幾分かは他人のためにこれを分かち、その幾分かはたくわえて不時の用にそなえ、また国家のため、社会のため、教えのために用いられることを喜ばなければならない」と載っている。その教えの核心は、家長たるべき者が家の経済を合理的に管理するのに必要な倫理規範や徳目を示すことにある。

種々の戒めを通じてみると、全体の基調は、世俗人にとっては、非常に禁欲的であるが、しかし極端な耐乏生活を強要しているのではなくて、仏教の「中道」思想により、収入と支出の均衡のとれた、当時の社会常識によって適当と思われる生活水準の維持を承認していたようである。

世尊の説法はいつもこのように臨機応変であり、この教化方法は〝病に応じて薬を施す〟方法とも言われる。

最後に、「三五　このように説かれたときに、資産家のシンガーラは世尊に向って次のように言った。世尊は種々のしかたで法を説き示されました。尊師よ。わたしは世尊に帰依し、また法とビクのつどいとに帰依しまつる。願わくは、世尊がわたくしを、今日より以後、いのちある限り、帰依する信徒として受けたまえ」と。ここで〈シンガーラに対する教え〉という経典が終る。「シンガーラへの教え」は、南方仏教では在俗信者のための戒律として重んぜられ、現在でも世俗人のために実生活の指針を述べたものとして非常に重んぜられている。

原始仏教において、釈尊は経済生活の面では、経済生活の安定が家族の健全な道徳生活を維持し、社会全体の秩

序を維持するための大切な前提であるとの認識に立って、「収入四分の計」の思想等に示される家計の合理的管理を説き、消費生活に関する根本精神として「少欲知足」を称揚すると共に、あらゆる場合に感謝して消費し、愛惜的に使用することによって財に十分の効用を発揮させることが説かれている。

三　大乗仏教に見る経済倫理のあり方

原始仏教以来、出家修行者はあらゆる生産活動から離れて、ひたすら修行に専念しなければならないものとされた。大乗仏教においても同様であり、中村元博士は、これを「世俗超越の倫理」と呼んでいる。それは、人間が身体と精神から成っているように、本来、人間の目的は物質的な欲望の追求が全てでない事を警告しているものと言えよう。ここに、出家修行者の反経済行為の真実の意味が認められよう。大乗仏教では、積極的に財の価値を説いているが、それはあくまで財を施与し、人々に財と法をもって奉仕するところに、財のもつ価値を実現する事ができると考えられていたからであった。大乗は民衆の仏教であり、在俗在家において、このような経済倫理が実践できる。そして、このような教えを説きうる立場にあるものは、あくまで出家修行者、大乗における出家の菩薩である。

大乗仏教は、僧院に引きこもって自らの解脱にのみ専念する従来の部派仏教の姿勢を小乗であると批判し、在家者と共に苦海を渡り彼岸に達する事の必要性を説いて、在家者や世俗的活動に接近するようになったからである。出家者・在家者共に同じ悟り・解脱を目指し、それは可能であるという思想が多面的視点から説かれるようになる。大乗仏教においては、「だれもが菩薩であり、だれもが仏陀になれる」と説かれるようになる。

インドの大乗仏教において展開された経済理論は、一般に経済活動を合理化する程度の積極性を示しはしたが、新たな資本主義的経済組織を助長し生成させたり、資本の形成に有機的に結合した経済倫理の展開に至ることはな

かった。

大乗仏教の経済倫理は、初期仏教の精神を踏襲、発展させたものである。特に、「悉く資財を捨てて衆生の意を満たす。」「菩薩は生活の資具を求める人々に対して生活の資具を授与する。」と説くように、第一に施与の倫理をみる事ができる。大乗菩薩の実践倫理である六波羅蜜（十地[4]、四摂法[5]も同じ事が言える）も、とりわけ施与の倫理を強調したものである。

原始仏教以来、部派、大乗、我が国の各宗を通じて説かれ、教えられている教えの初めに布施行があげられる

この六波羅蜜を大乗仏教の経済倫理として捉え、結果として生じるであろう「経済精神」との関連を示すと、次のように考えられる。

（一）布施波羅蜜は、財施、法施、無畏施等を行い、慳貪を対治、貧窮を除く事である。この行為は施与、社会奉仕、共済、離欲等の精神を生み出す。

（二）持戒波羅蜜は摂善法、饒益有情戒を保ち、悪業を対治、身心が清涼であるが、離欲、節制、節約、禁欲の精神をめざすものである。

（三）忍辱波羅蜜は、耐怨害忍、安受若忍、諦察法忍を行い、瞋恚を対治、その心の安住する事をいう。陰徳、堪忍、忍耐等の経済精神をよく表すものといえる。

（四）精進波羅蜜は、被甲精進、方便精進、饒益有情精進を行い、懈怠を対治、善法を助長する事であるが、経済精神としては、労働、職業への精励、精勤、勤勉に直結している。

（五）禅定波羅蜜は、現法楽住静慮、饒益有情精慮を行い、よく乱意を対治、内意を摂持する。堅実経営、冷静な判断等の精神が考えられる。

（六）般若波羅蜜は、縁世俗慧、縁勝義慧、縁有情慧をえて、愚癡を対治、諸法の実相を暁了する。才覚、算用、勘定、合理的経営等を想定できる。

このような六波羅蜜の実践倫理を通じて職業生活がなされていくようになると、現世の労働、職業は六波羅蜜を媒介として宗教的な行為、菩薩行となって展開される。このような価値転換がなされると、労働、職業は人間が生きていくための手段であり、単なる手段にすぎないとする考えが逆転して、労働、職業自体が菩薩行として聖化され、それらに宗教的な意味付けがなされていく。

第二に、生産、労働の倫理、職業倫理が見られ、その経済倫理として、幸せを生む田、すなわち福田[6]の教えにつながり、この教えこそ仏教に特有な社会事業の根本理念となる「七福田」である。仏教における公共社会事業を福田と呼ぶ。その七福田は次のように示される。（一）寺院等の建立、仏図・僧房・堂閣を興立する事、（二）造園・造池・植林事業、（三）医療活動、常に医薬を施して衆病を療し救う事、（四）造船事業、堅牢なる船を造りて人民を済度する事、（五）橋梁の施設、（六）共同井戸の掘削、道に近く井を作りて渇乏せるものに飲む事を得しむ事、（七）共同便所の施設、である。

例えば、寺院は貧窮の者の安息の場所でもあるから、寺院建立は難民救済の意味を兼ねていることが知られる。造船・橋梁施設も人民を河向うに渡すためのものである。このように七福田は、全て、人々の生活を向上させ、人々を安楽させるための公共事業である事が知られる。大乗仏教が福田思想を説いたことからは、今日においても仏教精神を生かす事が、社会の発展、繁栄に繋がる所以である事が知られるであろう。日本においても、戦後の様々の社会保障制度による国民の生活水準と消費水準の向上があげられるが、それは正に福田思想の実施と解される。福祉社会の建設において、上記の内容をおそらく世界で最初に説き、実践したのは大乗仏教であった事をおもえば、

その思想の説く社会的機能との関連の深さに、認識を新たにせざるを得ない。

わが国では、聖徳太子は、潅概排水の池や溝を作り、難波・京都間の道路を整備し、凶年に備えて各地に屯倉を置いた。福祉施設として、四天王寺に敬田院、施薬院、悲田院、療病院の四院を付属させた。奈良時代の行基（道路・橋梁）、平安時代の空海（香川：満濃池を築き、我が国最大の人工貯水池建造）らが実践し、橋梁を造り、造池をなし、本来の福田には含まれない道路開発事業をも推進した事は史上に残る偉業であり、大乗仏教の特色である。

このように世俗の職業が宗教的意義と関連付けられる事を、『法華経』（法師功徳品、第十九）では、「説くところの教えは意味に随って説かれ、皆、実相と違背しない。もし世俗の書物や、政治的な発言や、経済のことなどを説いても、皆、正しい教えに順っているであろう。生ける者たちの心の変化・心の動作・心の戯論するところを皆ことごとく知るであろう。（…中略…）皆これ仏の教えであって、真実でないものはなく、また過去の諸仏の経の中に説かれていた教えなのである」と説いている。

第三に、財に対する欲望を規制する商人倫理があげられる。

『菩薩地持経』[7]に説かれる四十七戒の中で、「他人の財物を盗むことを得ず」、「他人の財物を貪り利することを得ず」と説くのは当然のことであるが、「長き尺をもちて人を侵すことを得ず」、「短き尺をもちて人を欺くことを得ず」と説き、不正に計器を使用してはならないことを規定されている。商人は物の売買において、正しい計器を用いるべき事を説いた商人倫理である。

第四に、自利利他行があげられる。自利とは自ら利する意で、努力精進して修行の功徳を積み、それによってもたらされる悟りなどの効果を自らで受取る。利他は、他を利する意で、自らの善行による功徳を諸々の有情の救済のために回向し、衆生のために尽くすことをいい、この両面を兼ね備えた行為が菩薩の実践道とされている。自己

自身を利益することが、同時に他のすべてを利益し、それによって人間としての最高の自覚が完成されるという意味である。

人間完成とは個人的な人間完成ではなく、ことばの優れた意味において、全ての人々、社会の全体、一切衆生をあげての人間完成である。全ての生きとし生けるものの仏性の開顕と言えよう。

四　「少欲知足」（小欲知足）のあり方

次に、仏教的指針として最も引用されるのが、「少欲知足」[8]である。

仏典に説かれる「少欲知足」に関する言葉を例示すれば、釈尊は『スッタニパータ』において、「足ることを知り、わずかの食物で暮らし、雑務少なく、生活もまた簡素であり、諸々の感官が静まり、聡明で、高ぶることなく、諸々の家で貪ることがない」「腹を減らして、食物を節し、小欲であって、貪ることなかれ。かれは貪り食う欲望に厭きて、無欲であり、安らぎに帰している」と、説いている部分があげられる。

近代経済学が欲望を無条件に肯定し、消費の無限なる拡大を経済発展・経済成長の下、欲望肥大化と共に遂行してきた結果、人類は環境破壊を始めとする多くの危機に直面している。このような危機的状態からの脱却には、仏教の教える「少欲知足」の価値観に正に戻らなければならないと言われる。

仏教は、極端な禁欲主義と極端な快楽主義との両方を否定する「中道」を標榜しており、欲望を絶対的に否定しないが、その無限な拡大にも反対する。それがすなわち「少欲知足」として知られる仏教の立場である。欲望に無限がないとすれば、何処かで満足する事を知らない限り、人は不幸であるに違いない。そして、もし人の心がどこかで満足することが出来るのであるとすれば、出来るだけ少ない欲望で満足する事が最も経済的である。たとえ如

何に多くの手段を用いて経済的に豊かになったとしても、人間の精神が浄化されない限り、決して良き社会実現へ向かう事は出来ないと言えよう。現代の人類は、少欲知足の精神を知らなければならない。大切なのは、欲望の質と、何をどこまで求めるかというバランス感覚であろう。心の知足度が豊かさの基準といえよう。「知足」がいまだに新鮮なのは、これがいまだに行われていないためと言えよう。

五　「仏教経済学」の必要性―シューマッハ(E. F. Schumacher)氏と井上信一氏の主張―

1　シューマッハ著『スモール・イズ・ビューティフル―人間中心の経済学―』

シューマッハは、「経済学者の観点からみて、仏教徒の生活がすばらしいのは、その様式がきわめて合理的なこと、つまり驚くほどわずかな手段でもって十分な満足を得ていることである。」「唯物主義者が主としてモノに関心を払うのに対して、仏教徒は解脱に主たる関心を向ける。仏教経済学の基調は、したがって簡素と非暴力である」と述べ、「仏教経済学」の意義を主張した。彼は、一貫して現代経済学に対する批判的視点にたち、「仏教経済学が適正規模の消費で人間としての満足を極大化しようとするのに対して、「現代経済学者は、適正規模の生産努力で消費を極大化しようとする。消費を適正規模に抑える生活様式をとるには、最大限の消費への欲求を満たす場合よりはるかに少ない努力で足りることは見やすい道理である。」「生活水準を測る場合、多く消費する人が消費の少ない人より豊かであると言う前提に立って、年間消費量を尺度にする。仏教経済学者にいわせれば、この方法は大変不合理である。そのわけは、消費は人間が幸福を得る一手段にすぎず、理想は最小限の消費で最大限の幸福を得ることにあるはずだからである」と述べ、さらに「仏教経済学の研究を、精進や宗教の価値よりも経済成長のほうが重要だと信じている人たちにもすすめたいのは、現在われわれが経験している困難と将来の予想との二つを考えてのこ

とである。問題は「近代的成長」をとるか、「伝統的停滞」を選ぶかの選択ではないからである。問題は正しい経済成長の道、物質主義者の無頓着と伝統主義者の沈滞の間の中道、つまり八正道の「正しい生活」を見いだすことである。」と述べ、「わずかな手段（コスト）でもって十分な満足（効用）を得ていることである」と述べて、同著第四章「仏教経済学」を終える。

「これらの引用したシューマッハの言葉によって、同著で展開された、『仏教経済学』という言葉が活字として現れた最初であろう。」と指摘したのが、次節に述べる井上信一氏であるが、その後、仏教徒の立場からシューマッハの「仏教経済学」を推進しているのが、タイの僧侶プラユデュ・アラヤングクン・パユット（Prayudh Arayangkun Payutto）師（一九三九～）であり、自著 *"Buddhist Economics -A Middle Way for the Market Place,"*（Buddhadhamma Foundation,1992）にて展開している。パユット師は、シューマッハがその「仏教経済学」の出発点とした八正道の一つである「正しい生活」（「正命」）の意義と内容を、僧侶の立場からさらに明確にしたといえる。特に、パユット師は、仏教が釈尊の時代から、飢えや貧しさの克服には深い関心をもってきたことを同著において強調している。というのも、飢えた人、貧しい人にはダルマ（法・真理）に耳を傾ける余裕が生れてこないからである。さりとて、富を誇る立場もまたダルマを無視しがちである。ここからパユット師は、貧・富の両極端を離れる「中道経済学」が人間の真の幸福を実現するために欠かせないと主張する。

そして、「中道」とは、「適量（Just the right amount）」の意味であり、これこそが仏教徒の生活を貫く基本的な基準であると述べている。「適量」とは、節約を知るという事であり、「バランス、平衡」と同じ意味である。では何が「適量なのか」それは人が満足だと感じる内容が真の幸福と一致する点にある。従って、仏教徒にとっては、いかなる経済活動も、真の幸福や人生の質を増進、維持する手段であり、その逆はありえないと述べている。

2　井上信一著『地球を救う経済学』

表１　仏教経済学における井上信一氏とシューマッハ氏の比較

主要項目	井上信一氏	シューマッハ氏
基本的態度	キリスト教・西洋近代批判	西洋近代批判・西洋中世は肯定
依って立つ根拠	浄土真宗	ローマカソリック
キーワード	１）二つの気づき ２）「三つの柱」	「正しい生活」（正命＝生き方）
人間観	感謝・謝罪・自利利他円満	自己否定（懺悔）・利他主義
経済主体	自利利他円満	正しい生活
消費	少欲知足	最少の手段で最大の満足
財	宇宙からの預かりもの	一次財と二次財を区別
農業	宇宙の命に触れる	中間技術による開発に限定
職業経験	銀行員	経済顧問

（出所：駒澤大学仏教経済研究所編　『仏教経済研究』第30号）

現代において国内で初めて「仏教経済学」の意義・重要性を指摘したのが井上信一氏であり、同氏は、自説を『地球を救う経済学』および「やさしい仏教経済学」シリーズ『大法輪』（第六二巻二‐四号、平成一二年）で展開している。

井上信一氏は、自らの永年にわたる銀行家（日本銀行、宮崎銀行在職）としての業務環境を通じて、仏教と経済を融合する事を通じて、日本における仏教経済学の構築に努められた、数少ない経済人である。

「仏教経済学」は、シューマッハが『スモール・イズ・ビューティフル（*Small is Beautiful : Economics as if People Mattered*）の第四章「仏教経済学（Buddhist Economics）」を記述する迄は、実態は無きに等しいものであった。シューマッハの主張の本質は、大量生産・大量販売・大量消費という地球環境の汚染・破壊を防ぐ中間技術の提唱と「正命」という正しい生き方の追求と実践の必要性にあった。井上信一氏も晩年

に、自身が信心する浄土真宗の立場からこの二つの問題を考察する事に力を注がれ、自らの仏教経済学の樹立を目指された。シューマッハ協会（The Schmacher Society, Briton.U.K.）から同氏に論文を要請された事も同氏の主張が高く評価された事を示すものである。その日常における研鑽の一端が駒澤大学仏教経済研究所での活動であり、長年にわたる『歎異抄』研究の実践であったと言えよう。

同氏の説く「仏教経済学の本質―「地球を救う経済学―仏教からの提言」から―」は、「二つの気づき」を基礎とした「三つの柱」を立て、自身の直観的視野を駆使した思索を特徴とする。「二つの気づき」とは、①「アリガタイ」（生かされている事に気づく）②「スマナイ」（生かされている事に気付かぬ自身に気づく）である。「三つの柱」とは、①「自利利他円満の経済学」②「平和の経済学」③「地球を救う経済学」である。この五つの精神に則り、主著『地球を救う経済学―仏教からの提言―』において、右記の三つの柱を強調して、仏教経済学の全体像を提起する。これらの論点は、元より完成されたものでなく、その趣旨は普遍的な視野の提示であるが、その精神的根底には、浄土真宗の信仰の立場があった。

表1からもわかる通り、同氏が志向した仏教経済学とは、シューマッハの前著の展開が、カソリックに立脚し、かつビルマ（現ミャンマー）政府の経済顧問として、長く、現実の経済に捉われず理想的な経済を追求した事に基づくのに対して、同氏は長期の銀行員（日本銀行、宮崎銀行在職）の経歴を通じて、日本経済の現状を直視し、金融機関、労働組合の役割を肯定した上での仏教経済の意義を追求されたところに、その特徴が明確である。五つの精神に基づく謙虚さを真摯に生き抜く姿勢は多くの人心を掴み離さなかった。

前段の「アリガタイ」と「スマナイ」について同氏はこの二つの気付きは、「縁起の教理」の現代的表現であると示し、我々は宇宙、生物等の様々な物によって生かされている。「二つの気付き」は浄土教の「二種深心」の現代版で、「自

灯明法灯明」の精神であると説く。

そして「三つのスローガン」については、まず「自利利他円満の経済学」とは、経済行為において、「自分の利益だけ」ではなく、「他人様の利益の中で自分の利益を考える」という発想であり、親鸞著『浄土和讃』の「自利利他円満」の思想に示されるように、宗教面と共に経済面にも、滲み出る地下水の如きものなのである。

次に「平和の経済学」とは、仏教の一大特色に宗教戦争をした事がない事実に関連する。「不殺生」の戒があげられる由縁である。「殺すなかれ」の戒律は全てのいのちを対等に見る徹底した平等観に基づく寛容の精神であり、仏教の教えを「～したい心からの解放」に置く事にもあろう。対外的な平和とは、先ず国内平和が保たれてこそ可能である。その精神はアショーカ王が示した平和政策の第三に「徹底した寛容」としてある。現在はアショーカ王の石柱として知られ、石柱の図柄（サルナートに、法輪の刻まれた台座の上に四頭のライオンが背中合わせに坐っている彫刻をほどこした石柱）をデザイン化した石柱はインド国旗の紋章に採用されている。そしてその思想は、その後、聖徳太子の「十七条憲法」に継承され、同十条において平和の根本精神が正しく把握され、仏教精神が現実の政策に影響を与えた例となっている。

西欧社会で、信教の自由が公に主張されたのは、一六八九年、イギリスのジョン・ロックが発表した『寛容に関する書簡』であるといわれている。それに比して、仏教の他の宗教に対する寛容及び信教の自由に関する伝統の深さは驚嘆すべきものがある。

井上氏は、第一条「和をもって貴しと為す」を日本的経営の真髄と意義づけた。

最後に「地球を救う経済学」とは、同氏は「仏教的な思想が、地球の危機を救うのではないだろうか。いや、私は仏教的な思想によってしか地球は救われない、と思うのだ」と語り、「一切衆生悉有仏性　草木国土悉皆成仏」

と説く仏教は、全てのものは宇宙という大きな命の一部と理解する。現在「地球に優しい」という言葉が流行しているが、「地球にわびる」のが仏教の本心であり、この心の上に立つ経済学こそが、「地球を救う経済学」であり、カネを中心とした経済学に「命」が入らねばならぬ時が来ていると考える。

井上氏は各論のキーワードとして、前書内で、経済主体、消費、労働と労働組合、競争、生産と仕事、家計、農業、経済原則、政治と福祉、財政政策と教育、カネ、自由を掲示して、各章から仏教経済学を展開した。本稿では、次の三点から概要したい。

（1）「モッタイナイ」と「少欲知足の幸福」について

「モッタイナイ」（勿体ない）は昨今の流行語である（ケニア元環境副大臣でノーベル平和賞受賞者であるワンガリ・マータイ（*Wangari Muta Maathai*）女史〔一九四〇年～二〇一一年〕が二〇〇五年国連の京都議定書関連の会議で来日時にこの言葉と意味を知り、その後多くの国際会議で唱和した事で有名になった）が、仏教経済学は、宇宙に包まれた人間と経済とを問題とし、現実の経済活動の根本は「消費」であると考え、消費の因ってたつ源は欲望であり、欲望には個体保存欲（食欲）と、種族保存欲（性欲）があると捉える。

仏教ではこの基礎的な欲望を肯定し、これによって生命が保たれていると把握する。「末那識」と結んだ自己中心欲を「自我へのとらわれ」・我執と称し、最も警戒する。「勿体ない」という言葉こそ仏教経済学の消費に対する考えを集約したものと提起する。

哲学者のカーライルは「経済的幸福」を、財を分子、欲望を分母とする分子式で表し、分子は算術級数式に、分母は幾何級数的に増加すると付言した。分子を大きくする事によって、幸せになろうとするのが欧米式であるとすれば、分母を小さくしようとするのが東洋式、仏教式である。これは、ブータンのＧＮＨ（国民総幸福量）の考え

方に共通するものがある。

仏教経済学の消費観はまさにその欲望の抑制、すなわち「少欲知足」を唱えている。「少欲知足」の精神は、龍安寺のつくばい（手洗鉢）に彫られた「吾唯足知」の句に正に示され、それは生かされていることへの感慨でもある。仏教では、足るを知ることを知るのは贅沢な英知であり、逆に足ることを知らない心情は餓鬼とされる。

「モッタイナイ」こそ、仏教経済学の消費に対する考え方を集約したものであり、現代経済学では、生産、利益が多いほど、優良といえるが、仏教経済学では、地球上の生きとし生けるもの全てを活かしているかどうかが重要な尺度であり、地球環境保全への貢献度でもある。消費量は決して幸福の尺度でない事を一刻も早く我々が気付かねばならない。「モッタイナイ」とは、夫々の存在の尊さ、値打ち、いのち等の価値を無駄にする事への警鐘である。また利益とは道元が自著『正法眼蔵』の中で、「愚人思わくは利他を先とせば自らの利省かれぬべしと。爾にはあらざるなり。利行は一法なり。普く自他を利するなり」と記しているように、自利利他円満の実践であり、「利益の追求は自利と利他が一つになった行為」の意味である。正に、利益は目的ではなく結果である事を語るものである。

（2）家計について―分かつ心が原点―

近代経済学では、消費の大きさが幸せの大きさを決めるとの考えがあり、その背景には、現金収入を増加させる事が中心課題であり、国民総支出（ＧＮＥ）の大きさが各国の幸せの尺度であるとの思い込みがあった。仏教経済学では、家計こそ人間が独立して生きる基本である事は、「人は、だれでもその家計のことについては、専心に蟻のように励み、蜜蜂のように努めなければならない。いたずらに他人の力をたのみ、その施しを待ってはならない」と、『六方礼経』に記されたことばによく示されていると理解する。家計のあり方が、個人とその家庭を条件付けると言っても過言ではない。近代経済学では消費の大きさが幸せの大きさを決めるとの考えがあり、現代の社会問

題（主婦のパートタイム、子供の鍵っ子）等は、仏教経済学として問題にせざるを得ない所以となっている。仏教では、布施を大切にし、分かつ物がなくても「無財の七施」も立派な布施とされる。釈尊は、財の四分法を説き、収入を家計費、社会的支出、運転資金、貯蓄に分ける事を勧めている。「努め励んで（労働）得た富は自分ひとりのもとと考えて自分ひとりのために費やして（消費）はならない。その幾分かは、たくわえて不時の用にそなえ、また国家のため、社会のため、教えのために用いられることを喜ばなければならない」と、『法句譬喩経』においても説いている。

（3） 福祉について

仏教は日本での近代化推進の過程においては、明治初期では、貧困・公害に苦しむ人々に対し社会政策として殆ど役割を果たしえず、明治三〇年代になって、仏教の慈悲観を近代社会に位置付ける事が主張されたが、清沢満之は「慈善をする」という思い上がりを戒めた。そして、慈善を自著『精神講話』の中の「わが信念」において「私の信念は大略かくのごときものである。第一の点より言えば、如来は私に対する無限の慈悲である。（…中略…）かくして私の信念は、無限の慈悲を信じるのである。無限の慈悲なるがゆえに、信念確定のその時より、如来は私をしてただちに平穏と安楽とを得しめたもう。」と述べ、正に、自利利他一如の如来による慈善として捉えたことは、極めて重要なことと思われる。ここに今後の仏教的福祉の方向があるのではなかろうか。仏教経済学の福祉は、全ての人が仏の子であるとの自覚から出発する事が必要であり、決して強者から弱者への憐みで行われるものではない。その意味で、「自利利他一如の如来による慈善」は、福祉の根本にくる言葉であろう。

欧米経済学の福祉は、初期資本主義の下における労働者の悲惨な労働条件と生活を、国家の力により緩和修正しようとする企図から生じたものである。労働者の力で経済の屋台骨をひっくり返そうとしたのが社会主義・共産主

義経済学であったが、その帰結は旧ソ連・東欧の実情であった。

仏教の福祉は、初めから魂の向上をめざしたものであったのである。

六　最後に

現代人は、幸福である事を願い、求めている。人生における幸福とは何か。それは先ず経済的行為にもとづいて、物質的に恵まれた生活を幸福とか、幸せという言葉で表現する事が殆どである。勤勉が万人に普遍的に要求されるのは、物質的に恵まれた豊かな生活をもたらすための必要手段であり、方法であるからである。大切なのは、物質的に恵まれ、幸せになる事が人間の本性として全てであるかどうかであろう。それは確かに本性の一つに違いないが、充足されたとしても全てが満たされるものでない。勤勉と徳が、本性を満たす一手段であり、物質上の幸福を得るための行為に有効な仕方である事を確認する必要があろう。

人間は悪と欲望から容易に抜け出す事は出来ないという、シビアな人間観を前提にすれば、現代の危機の深刻さに対応するだけの強靱なる信抑心が求められよう。即ち、現代の高度資本主義において、「利潤」のためではなく、人間の暮らしのための経済を確立するために、個人個人自らの心の変換（「渇愛」から「喜欲」へ）に期待するだけでなく、経済をめぐる制度再構築への取り組みとが求められるという事である。個人はあくまでも欲への誘惑に負けやすい存在という事を認めた上で、法律や制度の力を借りて悪への誘惑を少しでも減らすという努力をするのである。個人への認識のみに終わるのではなく、社会的な制度と法律の変革への積極的な取り組み、それが、仏教徒が信仰に生きるための経済倫理といえるものであろう。

経済倫理は、どこまでも世俗倫理であり、絶対の心の安らぎ、安心は宗教倫理において問題とされるものである。

禅定と智慧は人間性を深める上で、あらねばならない実践体系を大乗仏教の立場から示している。経済倫理が単なる経済倫理にとどまらず、それを超越するところに、人間性の実存的問いかけが隠され、そこにおいて、経済倫理と宗教との接点を見出す事が出来よう。

現代に生きて働いている仏教を離れて仏教の存在理由はありえない。仏教を単なる過去の遺産や古典と化さしめないためにも、現状の布教教学活動に確固たる基礎と一定の方向性を与えるためにも、現代社会の問題意識と連関付けねばならない。新たな仏教の創造への結集が始まらなければならないであろう。

くりかえしとなるが、仏教に必要な経済倫理とは、決して個人の「心掛け」を説く事に主眼があるのではないと思われる。人間は業縁次第で何を行うか不明な存在であり、私益のためには手段を選ばぬという精神をも持っている事を熟知しているからこそ、貪欲と悪を抑制する制度や法律の構築にむけて努力をする事が、とりもなおさず、仏教の経済活動にたいする基本的な態度とも言えよう。

注

（1）一八九五～一九七三年。大正・昭和時代の学僧。仏教革新のために真理運動を提唱し、仏教の民衆化・社会化に努め、戦後は全一仏教運動を展開した。浄土宗の僧となり、一九二七年独・仏に留学後、仏教法制経済研究所・国際仏教協会等を設立。一九三四年ＮＨＫラジオ放送で『法句経』を平易に講義後、反響大きく仏教復興の端緒を開くと同時に、仏教革新の全日本真理運動を展開した。戦後浄土宗を離脱、全日本仏教会初代事務総長となる。庶民的語りかけをした努力は高く評価される。

（2）原始仏教における世俗倫理の説は、種々の人間関係に即して散説されていたが、もろもろの教えがある時期に体系化されるに至り、その最も完結したものであり、これはパーリ語の原始仏教経典の中に伝えられ、またその相当漢訳が四種、漢文の大蔵経の中に伝えられているが、その文句はかなり相違している。諸本として①略号『パーリ本』長部第三一経　②

略号『六方礼経』③略号『善生子経』④略号『善生経』第一二、第十九。原型の部分は、アショーカ以前、恐らくはマウリア王朝以前に成立したと考えてよい。アショーカ王詔勅と『シンガーラへの教え』との間に重大な差違は存在しないと言えよう。

(3) 後漢の安世高訳。一巻。釈尊がシンガーラに対し在家者の倫理を説いたもの。六向拝の法を念じて礼拝し、これらの人々に対し守るべきことを守って常に行徳を善修すべきであると教えた。釈尊の実際的教化を知るのに絶好の資料の一つ。もろもろの徳が非常に具体的に、生き生きと述べられている。これはインドの原典にあったとは考えられないから、翻訳者がかなり加筆したものであろう。散文のみで述べられている。

(4) 菩薩修行の階位五二位中の第四一位から五〇位迄の十位をいう。悟りへの道を示す重要な段階であるとされる。

(5) 菩薩が人々を救うために摂め取る四種の方法で、原始仏教以来、仏教の実践体系として広く説かれている、利他行の一つ。布施摂、愛語摂、利行摂、同事摂をいう。

(6) 幸福を生みだす田、という意味。布施や供養などの種をまけば、かならず幸福として実を結ぶことを田地に例えたもの。氏天王寺の悲田院・敬田院はこの考えを背景として造られた。呼称として、敬田・恩田・悲田を三福田ともよぶ。その他に二福田、四福田、八福田の区別もある。

(7) 大乗菩薩の修行の方法を詳説したもの。大乗戒は出家在家の菩薩としての生活態度に主点を置く。中国で成立。罪の重い十重禁戒と罪の軽い四十八軽戒から成る。

(8) ものごとにおいて多くを欲せず、たとえ少なく得ても不満をもつことなく、それに満足すること。人間が自己の中に身につけなければならない善行為の一つである。

参考文献

阿満利　麿　『社会をつくる仏教』人文書院　二〇〇三年

井上　信一　「やさしい仏教経済学②」(『大法輪閣』大法輪閣) 一九九三年三月

井上　信一　『地球を救う経済学—仏教からの提言—』すずき出版、一九九四年

大谷　大学　『清沢満之全集』第六巻　岩波書店　二〇〇三年

大野　信三　『仏教社会・経済学説の研究』有斐閣、一九五六年

鎌田　茂雄他編　『佛教大事典』小学館、一九八八年

木村　日紀　『アショーカ王とインド思想』　教育出版センター　一九八五年
外園　幸一　「経済と仏教倫理」（『地域経済政策研究』）鹿児島大学、二〇〇〇年
拙　著　「井上信一氏における仏教経済学の構築いついて」（『印度學佛教學研究』第五十八巻第一号）日本印度学仏教学会、二〇〇九年十二月
中村　元　『原始仏教の生活倫理』（中村元選集第十五巻）春秋社、一九七八年
中村　元　『仏典のことば』サイマル出版会、一九八九年
中村　元　『原始仏典』筑摩書房、一九八一年
中村　元　『仏典Ⅱ』（世界文学全集七）筑摩書房、一九五八年
奈良　康明編　『日本の仏教を知る事典』東京書籍、一九九四年
平川　彰他　『仏典解題事典』春秋社、一九七七年
仏教伝道協会編　『仏教聖典』仏教伝道協会、一九八五年
寶角正三郎　『仏教の倫理と経済』四恩社、一九九四年
渡辺　照宏　『仏教　第二版』岩波書店、一九七四年
C・アレン（C・Allen）　『Ashoka』The Overlook Press 二〇一二年
E・F・シューマッハ（E.F. Schmacher）（小島慶三・酒井懋訳）　『スモール・イズ・ビューティフル―人間中心の経済学』講談社、一九九六年
E・F・シューマッハ（酒井懋訳）　『スモール・イズ・ビューティフル再論』講談社、二〇〇〇年